

線形最近の心

霊媒師

よみがえる悪夢の記憶

も月に一回ぐらい、こんなブラッシュバックがあるんだ」と、疲れた表情で話した。

一九八一年、カンボジアから妻と子供二人を連れ、難民として渡ってきた。ポト派と戦う政府軍兵士だった。

ポト時代、多くの男が労働部隊に入れられた。サムウーも水路やダムを作った。

仲間が次々に処刑された。ポト派は「弾を節約する」といって、竹の棒で後頭部を殴って殺す。腹を裂くこともあった。食べ物も薬もなく死んでいく二歳の子供がいた。そんな死を、三十回は見た。

数年前、激しい頭痛が始まった。硝煙のにおいがする。敵が怖くてたんに隠れる。息ができない。昨夏、友人の

夢に苦しんでいた。ソン・サン派の兵士だった。内戦下、山の中で七年間。敵対するベトナム軍に何度も追いかけられた。偵察に出る気がつく二人、敵に阻

まれていた。銃声が四方から迫ってきた。藪(やぶ)に身を伏せ、撃ちまくって切り抜けた。こんな体験を、今も繰り返し夢に見る。

霊媒師の家で、ブソリーに出会った。国道3号に面したトタン屋根の農家の二階。カム・キム(幸)の「診療室」には香がたかれ、祭壇に仏像が並んでいた。

服をぬいだブソリーの体は、サンスクリット語だといろ紫色の文字で覆われている。「弾が当たらない」と聞き、当時彫った入れ墨だ。

かが気味の霊媒師は鼻をかみながら、まじないを唱えた。急げのけぞり、ぐったりした。立ち上がり、甲高い声で「仏の言葉」を告げた。

「入れ墨に合わない悪い料理を食ったから、腹に悪霊がとりついたので。牛とカニを食べてはいけない。他人の妻を笑ってはいけない」。途中で一度、くしゃみが出た。

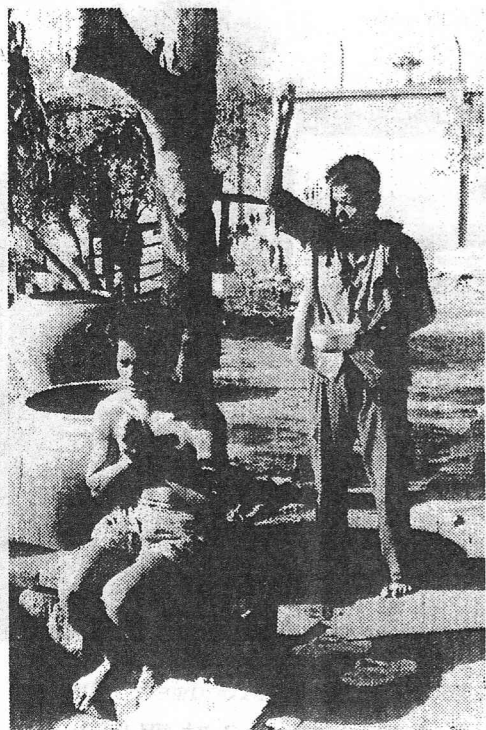
キムのもとには毎日、十人以上の患者が訪れる。腸子フ

長い戦火、傷ついた心 専門医はわずか1人

戦火が、千年以上続いたカンボジア。歳月が流れ、一度は遠のいた悪夢の記憶が再び、よみがえることがある。PTSD(心的外傷後遺性ストレス障害)と呼ばれる。ワシントン郊外にあるランのクリニックには、過去六年間で百六十五人のカンボジア難民が悩みを訴えにきた。八〇％は、恐怖の再生に脅えるPTSDの患者だった。

だが、カンボジアで人々を治療するのは「アルクメー」と呼ばれる霊媒師や伝統的治療師である。この国にいる精神科医はたった一人。その医師カエ・チュム(昌)は「薬も金も乏しく、精神医療はいつも後回しだ」という。

アジア医師連絡協議会(AMDA)メンバーの精神科医、桑山紀彦(彦)は今年三日、現地調査を終えて帰国した。精神科医の育成に向けたプロジェクトを進めている。だが指導するのか、患者は何人いるのか。課題は多い。桑山は「社会の混乱が続く、人々は精神的に傷ついている。心の面からの復興を忘れてはならない」と話している。(敬称略)



「霊堂よ去れ」と何度か叫びながら、霊媒師キムは患者に水をかける
＝ブソペン郊外で

星条旗が翻る異郷の街を、サムウー(西)の黒塗りの車は走り続ける。ワシントンでタクシー運転手になって十年。朝五時から深夜まで、官庁街周辺を流している。戦慄(せんりつ)は一瞬、前触れもなくよみがえる。突然、ボル・ポト派の兵士が追いかけてくる。死体が転がっている。後者の客を思わず、振り返って見ることがある。「今で